

現代エジプト小説における祖国像《断章》^{ワタン}

福田義昭

I. はじめに

本稿の目的は、20 世紀の終盤以降に発表されたエジプトの新しい小説作品をいくつか取り上げ、祖国や国民共同体の表象が、以前と比べてどう変化したか、その一端を探ることである。そのため、従来のエジプト小説——とくにナギーブ・マハフーズ (Nagīb Maḥfūz, 1911 - 2006) の作品——における祖国像を簡単に振り返ったうえで、それと比較しながら議論を進めていく。扱える作品も分析視角も限られたものにすぎないが、こうしたテーマを議論する際のとっかかりとなるような点をいくつか例示してみたい。

II. 祖国（ワタン）という言葉

現代アラビア語で「祖国」という意味をもちうる語は複数あるが、とくに重要なのは「ワタン(وطن waṭan 複数形は 'awṭān) である。前近代から「生誕地」や「滞在地」をあらわす語として使用されていた¹。いわゆる「郷愁」「望郷」「ノスタルジア」などにあたる「ワタンへの思慕」(al-ḥanīn 'ilā al-waṭan) は古典詩のトポスでもあった。しかし 19 世紀になって、エジプトの啓蒙家タハターウィー (Rifā'a al-Ṭaḥṭāwī, 1801 - 1873) が同時代のフランス語の *patrie* に等しいニュアンスをこの言葉に付与し、そうした意味内容を普及させた。彼はアズハル学院出身の学者であったが、エジプトの統治者ムハンマド・アリー (在位 1805 - 1848) が派遣した留学生らに同行してフランスへ渡り、そこでモンテスキューなど啓蒙思想の影響を受けたのだった²。タハターウィーが言うワタンはアラブの土地全体ではなく、エジプトを意味していた³。それは、国民国家時代の「祖国」観に近いもので、彼より半世紀前に生まれた宗教知識人ジャバルティー ('Abd al-Raḥmān

¹ U. Haarmann, "WATĀN" in P. J. Bearman et al eds., *Encyclopaedia of Islam*, New ed., Vol. XI, Leiden: Brill, 2002.

² タハターウィーによる近代的ワタン概念の導入については、Albert Hourani, *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983 (Reissued, with a new preface; first published in 1962), Chapter IV を参照。

³ *Ibid.*, p. 79.

al-Jabartī, 1753 - 1825) —— フランス軍によるエジプト侵攻 (1798 - 1801) に関する証言を残した年代記作者——にはなかったものである⁴。20 世紀の文人アハマド・アミン ('Aḥmad 'Amīn, 1886 - 1954) は『エジプト慣習伝統表現辞典』(1953 年) に「愛国的感情」(al-shu'ūr al-waṭanī) という項目を立て、冒頭でつぎのように述べている。

これ〔＝「愛国的感情」〕について記述するのは、それが国民 (al-'umma) のあいだに生じた社会現象の一つで、彼らの生活に影響を与える一要素となっているからである。最近になって外来のもの (al-'ajnabī) と接触し、それを模倣するようになるまで、こういったものは存在しなかった。フランス人がエジプトを攻撃したとき、愛国的感情なるものはおもてには出ていなかった。あったのは、ただ宗教的感情 (al-shu'ūr al-dīnī) だけである。⁵

ローカルな社会や土地に対する愛着は今も昔も変わらない。しかし、それ以上のレベルには変化が生じた。宗教的帰属意識が圧倒的に優勢であった時代から民族的・国民的帰属意識がそれと競合する、あるいはそれを凌駕する時代に入ったということである。やがて、「ワタン」の語義もタハターウィーが付与した意味が一般的になり、それが愛国心やイデオロギーとしての国民主義（一国ナショナリズム）を意味する「ワタニーヤ」(waṭaniyya) へとつながっていった⁶。

III. エジプト人とワタン

周知のとおり、アラブ世界には人工性の高い国家が多く、現実には各国が国民やワタンの創出に苦労してきた歴史がある。そうしたなか、地理的・歴史的条件により、比較的スムーズに国民の創出や統合、統一されたワタン意識の強化をなしとげてきたエジプトは例外的である。中東・イスラーム史の専門家ラビダスは『イスラーム社会の歴史』の中でつぎのように言う。

⁴ Jack A. Crabbs, *The Writing of History in Nineteenth-Century Egypt: A Study in National Transformation*, Cairo: The American University in Cairo Press, Detroit: Wayne State University Press, 1984, p. 78.

⁵ 'Aḥmad 'Amīn, *Qāmūs al-'Ādāt wa-l-Taḳālīd wa-l-Ta'ābīr al-Miṣriyya*, Cairo: Maktabat al-Nahḍa al-Miṣriyya, 1992, p. 250. なお引用文中の亀甲括弧〔 〕は引用者による補足を示す（以下同様）。

⁶ 紙幅が限られているので本稿では詳述できないが、実際には、アラブ民族主義的な（アラブ世界全体をさす）「アラブのワタン」(al-waṭan al-'arabī) という用法もある。また、宗教的な用法——特にスーフィズムなどにおいて、来世を本来のワタンとし、現世の人間を異郷状態 (al-ghurba) にあるとみなす伝統など——もある（第5節のマハフーズの例を参照）。

エジプトでは国民感情 (National feeling) が容易に醸成されたようだ。ナショナリズムが自覚的な教義となる以前から、エジプト人の著述家たちはエジプトをごく自然に「ワタン」すなわち母国 (motherland) と認識してきた。この国の同質性と隔離 (isolation)、長きにわたる中央政府の歴史、独特の文化的過去などがエジプト的アイデンティティ意識の発達をうながした。中東の他のどの国にもまして、エジプトでは、エジプト人やエジプト国家という由緒ある歴史的存在にもとづいて近代国民国家が成立している。⁷

大多数のエジプト人にとって、エジプトというワタンはほとんど所与のものである。基本的に農業国であったことも、国民と土地 (象徴としてのナイル川を含む) の結びつきを強めた要素として挙げられる。ムハンマド・アリー王朝 (1805 - 1953) の成立によって (名目上はともかく) 実質的には独立した政治単位となるのが早かったことにも重要な意味がある。独自の軍隊や徴兵制度、ジャーナリズムや出版事業などが他のアラブ地域に先駆けて開始され、それらをとおして国民意識が醸成されることになった。タハターウィーのような人物がエジプトから出てきたのは自然なことだった。

また彼が活躍したころから、ヨーロッパでエジプト学が飛躍的に発展した。タハターウィー自身も滞仏中にこの分野に関する知識を仕入れており、帰国後はシャンポリオンの助言を受けたムハンマド・アリーの命令で考古学的遺物の管理にかかわったりしている⁸。ヨーロッパ人の視線を受けて、エジプト人自身が忘れていた自らの過去を再発見していく過程もまた、エジプト国民を作り上げる重要な契機となった。のちにはツタンカーメンの墓の発見 (1922 年) もあり、エジプト国民主義の一形態であるファラオ主義 (Pharaonism) が隆盛をみる時代がやってくる。古代エジプト文明の遺産は国民にとって死活的に重要な観光資源になると同時に、一部のイスラーム主義者の冷淡な態度をのぞいて、大多数の国民の誇りの源泉になった。

無論、イスラーム主義的潮流を見ても明らかなように、一般のエジプト人が宗教を忘れて世俗主義的ナショナリズムに染まりきることはありそうにない。宗教的感情への配慮は常に必要であった。タハターウィーも宗教との折り合いをつけずに祖国愛を謳えたわけではない。彼は『現代的教養の喜びにおけるエジプト的精神の道筋』(1869 年) とい

⁷ Ira M. Lapidus, *A History of Islamic Societies*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, p. 622.

⁸ Donald M. Reid, "Nationalizing the Pharaonic Past: Egyptology, Imperialism, and Egyptian Nationalism, 1922-1952," James Jankowski and Israel Gershoni eds., *Rethinking Nationalism in the Arab Middle East*, New York: Columbia University Press, 1997, pp. 127-149: p. 131.

う本の中で、「祖国愛は信仰の一部である」(ḥubb al-waṭan min al-ʾīmān) という——信頼性は低いとされるが——ハディース(預言者の伝承)などを引用しながら、祖国愛はむしろ宗教的な要請であることを主張したのだった⁹。

IV. 近代エジプト文学と国土としてのワタン

近代国家としての制度が整うことにより、人の移動が活発になる。官僚制や交通網、産業の発達、兵役などにより、国内を移動する人々が多くなる。「国土」を発見する機会も増える。また外交や留学、貿易などによって国際的な移動も盛んになり、外国と自国を比較する機会も生じる。これらすべてが、ワタン意識を強めることになる。

エジプトの作家たちも、自然や地方の風物、エジプトの国土をあらためて発見した。初期エジプト小説の代表的作品『ザйнаブ』(Zaynab, 1913 年)を書いたムハンマド・フサイン・ハイカル(Muḥammad Ḥusayn Haykal, 1888 - 1956) もそうである。この作品自体に下エジプトの農村風景が魅力的に描かれたが、『文学の革命』(1933 年)に収められたエッセイ「国民文学」(al-ʾadab al-qawmī)の中でも、ヨーロッパ体験を経たうえでの国土再発見の感動がつづられている¹⁰。「短篇小説のプリンス」ユースフ・イドリース(Yūsuf ʾIdrīs, 1927 - 1991)は最初の短篇集『一番安上がり之夜』(ʾArkhaṣ Layālī, 1954)にその名も「世界の母」(“Umm al-Dunyā”)という作品を収め、ヨーロッパから船で帰国する他人同士のエジプト人たちが、眼前にアレクサンドリアの岸辺を見た瞬間、ほとぼしる祖国エジプトへの想いのみによって連帯感を抱く様子を描いた¹¹。

都市民ないしは農村から都市に出たものが、地方を訪問することによって、国土を(再)発見する様子は多くの作品に見られる。近代エジプト演劇の父タウフィーク・アル＝ハキーム(Tawfīq al-Ḥakīm, 1898 - 1987)は「田舎検事」として農村に滞在することによって下エジプト農民の精神を異文化として知った(『田舎検事の日記』Yawmiyyāt Nāʾib fī al-ʾAryāf, 1937 年)。ヤハヤー・ハッキー(Yahyā Ḥaqqī, 1905 - 1992)もまた法曹界の仕事で赴任した上エジプトで自国の新たな顔を発見し、短篇集『血と泥』(Dimāʾ wa-ṭīn, 1945 年)などを刊行した。ファトヒー・ガーニム(Faṭḥī Ghānim, 1924 - 1999)の長篇『山』

⁹ Rifāʾ al-Ṭaḥṭāwī, *Manāḥij al-ʾAlbāb al-Miṣriyya fī Mabāḥij al-ʾĀdāb al-ʾAṣriyya*, 2nd ed., Cairo: Sharikat al-Raghāʾib, 1912, p. 10 (reprint, Cairo: al-Hayʾa al-Miṣriyya al-ʾĀmma li-l-Kitāb, 2010.)

¹⁰ Muḥammad Ḥusayn Haykal, *Thawrat al-ʾAdab*, 2nd ed., Cairo: Dār al-Maʾārif, 1986?, pp. 105-120.

¹¹ Yūsuf ʾIdrīs, *al-Qiṣaṣ al-Qaṣīra 2 (al-ʾAʾmāl al-Kāmila)*, Cairo: Dār al-Shurūq, 1991, pp. 787-806. 「世界の母」はエジプトあるいはカイロの美称。

(*al-Jabal*, 1959 年) もカイロ人の上エジプト発見という点では似たようなところがある。

しかし興味深いことに、エジプト国民文学のチャンピオンとみなされているナギーブ・マハフーズの作品には、国土全体に対するイメージや祖国発見の描写といったものが見当たらない。そもそも彼の作品では、エジプト小説でおなじみの都市と農村の対立もほとんど扱われていない。彼の小説世界で都市と対立するのは農村ではなく、荒野(沙漠)である。この点で、実はマハフーズはかなり特殊である。次節では、そのマハフーズ作品における独特な精神地理について述べることにしたい。

V. 1919 年革命の子、ナギーブ・マハフーズ

マハフーズには『わが祖国、エジプト』(1997 年) という対談集がある。その中で、対談相手の作家ムハンマド・サルマーウィーは「ナギーブ・マハフーズとエジプトはほとんど同義語となった」とまで述べている¹²。マハフーズ自身はこの対談集で自らを「19 年革命の子」だと言っている¹³。第一次大戦後、世界的な民族自決の機運の中で起きたエジプトの 1919 年革命(英国の支配に対する抗議運動)は、結果として 1922 年のエジプト独立を導くことになった画期的な出来事だった。このときの有名なスローガンが「宗教は神のもの、祖国はみなのもの」(*al-dīn li-llāh wa-l-waṭan li-l-jamī‘*) である¹⁴。実際、抗議運動は宗教や階層、性別の垣根を越えてエジプト全土に広がった。1911 年生まれのマハフーズが子供時代に目撃したこの革命は、彼の政治意識の出発点となり、「原風景」として作中に繰り返し登場するテーマとなった。

では、マハフーズはワタンをどう描いたのか。ここでは要点だけを記す¹⁵。生涯のほとんどをカイロですごした彼にとって、この都市は祖国全体の縮図だった。第二の都市アレクサンドリアすら一種の国内亡命地であり、カイロから流れてきた人物がそこで「異

¹² Nagīb Maḥfūz, *Waṭanī Miṣr: Ḥiwārāt ma‘a Muḥammad Salmāwī*, Cairo: Dār al-Shurūq, 1997, p. 19.

¹³ *Ibid.*, p. 10.

¹⁴ この表現は多様な解釈を生む。今日、イスラーム主義的立場からこれを問題視する人もいる。いわゆる「イスラム国」などのスローガンとして使われている「忠誠の対象はイスラームであり、祖国ではない」(*al-walā‘ li-l-‘islām, lā li-l-waṭan*) と比較すればよい。他方、リベラルな理念を擁護する立場から、このスローガンを引いてエジプトの現状を批判する人もいる——「宗教は神のものではなく(宗教者たちだけのものとなり)、祖国もまたみなのものではなくなった(金持ちだけのものとなった)」(*Ḥilmī Sālim, “al-Dīn wa-Ḥurriyyat al-Ta‘bīr: Khaṣmān ‘am Ṣinwān,” ‘Adab wa-Naqd*, No. 280, Dec. 2008, pp. 4-12; p. 9).

¹⁵ これについては、拙稿「神話的空間としてのカイロ——“越境しない作家”ナギーブ・マハフーズの小説世界」(『国際シンポジウム 交差するアジア・北アフリカ文化・科学技術研究: 報告論文集』筑波大学北アフリカ研究センター、2005 年、102-111 頁) に詳しく書いた。

郷感 (al-ghurba)』を味わいつつ、歴史を呪う (3:74)¹⁶。政治的・文化的中心であるカイロ周辺には古代から現代にいたるまでのあらゆる歴史がそろっている。それだけでなく、マハフーズが生まれた旧市街には、都市的共同体としてのハーラ (hāra 街区) が存在した。そこから彼は、カイロのさらに一部であるハーラを祖国全体のメタファーとして描くようになる。やがて、彼のハーラは祖国エジプトにとどまらず、全世界として表象されるようになった。『我らがハーラの子供たち』(‘*Awlād Ḥāratinā*, 1959 年) や『ハーラーフィーシュ叙事詩』(*Maḥamat al-Ḥarāfīsh*, 1977 年) では、他の人間世界は存在しないに等しく、ハーラだけで人間存在の普遍的な意味が探求される。マハフーズ自身もこれについて言及している。

それ〔ハーラ〕は、あるときは、私が幼い頃に知った現実のハーラであり、またあるときは『ミダック小路』においてそうであるように、祖国 (al-waṭan) の象徴であり、また別のときには『ハーラーフィーシュ叙事詩』や『我らがハーラの子供たち』においてそうであるように、この世界 (al-dunyā) すべての象徴なのです。¹⁷

中世から「カイロ (エジプト) は世界の母」(Miṣr ‘umm al-dunyā) という表現があるが、al-dunyā はもともと「現世」を意味する宗教的な語であり、al-‘ākhirā (「来世」) と対になっている。実際、ハーラの東隣には墓地をはさんで荒野が広がる。この荒野はマハフーズの小説世界では al-khalā’ (空虚) と呼ばれ、単なる物理的空間以上の、精神的・宗教的な意味合いが付与された。

ハーラは人間が属すべき共同体であり、『ハーラーフィーシュ叙事詩』の終盤では「人間はいつか自分のハーラに帰らなくてはならない」(4:916) という言葉が作中人物の口をとおして語られる。マハフーズにおいて、ハーラは祖国であり、全世界であり、人間が最後に戻るべき故郷として表象されている。これに対するアンチテーゼは、マハフーズの作品ではおなじみの人物類型である神秘主義者たちである。彼らは中心人物たちに警告を発したり、示唆を与えたりする役目を担う周辺の人物であるが、彼らにとってはこの世自体が異郷である。『アラビアンナイトの夜々』(*Layālī ‘Alf Layla*, 1982 年) に出てくる長老が言うように「我々はみな異邦人 (ghurabā’)」(5:397) なのである。

¹⁶ 『うずらと秋』(*Al-Summān wa-l-Kharīf*, 1962)。なお、マハフーズの小説作品からの引用は全集 (Nagīb Maḥfūz, *al-Mu‘allafāt al-Kāmila*, 5 Vols., Beirut: Maktabat Lubnān, 1990-94) から行い、巻・ページ番号のみを記す。

¹⁷ Nagīb Maḥfūz, *Waṭanī Miṣr*, p. 14.

VI. 新しい作家たち

20 世紀前半から半ばにかけて活躍した作家たちにとって、「エジプト」は、それ自体疑う余地のない価値だった。政権や祖国の現状を批判することはあっても、祖国自体、エジプト人であること自体に疑問を投げかけることはほとんどなかっただろう。1907 年に国民党 (al-Hizb al-Waṭanī) を設立したムスタファー・カーミル (Muṣṭafā Kāmil, 1874 - 1908) にいたっては「たとえ私がエジプト人でなかったとしても、エジプト人になりたいと願ったことだろう」(“law lam ’akun miṣriyyan la-wadidtu ’an ’akūna miṣriyyan”) とまで述べたと言われている。極端なイスラーム主義者でないかぎり、政治的立場はどうあれ、愛国主義的態度はひろく一般にみられるものであった。

しかし、2000 年前後に活躍しはじめたエジプト人作家の作品には、無条件の愛国主義を拒む態度も見られるようになってきた。たとえば、アラー・アル＝アスワーニー (‘Alā’ al-’Aswānī, 1957 -) に「近づいて見た者」(“Alladhī Iqtaraba wa-Ra’ā”) という中篇がある¹⁸。語り手は 30 代半ばの独身男性で、エジプト社会の何もかもに失望し、憤り、嫌悪感を抱いている。周囲の人間はエジプト的メンタリティを代表する諸類型のうちでも最悪の人たちばかりであり、彼はこういったすべてを深く憎んで、人々と衝突し、孤立・孤独を深めていく。彼が最後に行きつく場は精神病棟しかない。この作品の冒頭で、語り手はさきのムスタファー・カーミルの言葉を掲げて次のように批判する。

手記を始めるにあたって、このセリフを選んだ。というのも、思うに、今までこれほどくだらない言葉は聞いたことがないからだ！ 仮に本心から言っているのなら、そんなものは馬鹿げた部族主義的偏狭さの一種であって、考えただけでも怒りがこみあげてくる。(……) 一つでもエジプト人の長所を挙げられる奴は挙げてみるがいい。臆病さ、欺瞞、悪意、卑屈さ、怠け癖、憎悪、我々エジプト人の性格とはこんなところだ。(……) 小学校二年生の国語の教科書にこんな言葉が載っているのを読んだことがある——「神さまはエジプトをととても愛してくださり、その高貴なる書〔クルアーン〕の中でも名前を出しておいでです。それで、エジプトに夏も冬も温暖ですばらしい気候を与えてくださり、同時に敵の計略から守ってくださっているのです」。子供たちの頭の中にどんな嘘のかたまりを詰め込もうとしているか

¹⁸ 現在はこの題名で短篇集『友軍砲火』(Nirān Ṣadiqa, 2004) に収められているが、もとは同名の『近づいて見た者』(1990) という短篇集 (副題: 「みじめなエジプト人の状態さまざま」) に「イサーム・アブド・アル＝アーティーの手記」(“‘Awraq ‘Iṣām ‘Abd al-‘Āṭī”) という題名で収録されていた。

見てほしい。この「温暖ですばらしい我が国の気候」ってのは、それこそ地獄そのものだ。三月から十月までの七ヶ月間、燃えるような暑さが俺たちの肌を焼く。家畜が死んで、あまりの酷暑に道路のアスファルトが溶け出してしまうほどだ。それでもまだ、我が国のすばらしい気候に関して神を賞賛するわけだ。それに……もし奴らが言うように、神さまが敵の計略からエジプトを守ってくれているなら、どうしていろんな民族に占領されなくてはならなかったのか？ エジプトの歴史なんて、ローマ人からユダヤ人にいたるまで、あらゆる民族によって味わわれた敗北の連続にすぎない。¹⁹

ムスタファー・カーミルの言葉を真っ向から否定し、エジプト人のメンタリティだけでなくエジプトの自然までが嫌悪の対象になっている。愛国主義が標準的な立場ともいえる国では、いかに風刺とは言え、タブーに触れる筆致である。事実、サビール書店版の前書によると、1989年にこの作品を書き上げたあと、国営書籍公社に原稿を持って行ったところ、審査委員会一致の意見によって出版を拒否された。報告書を見ると、短篇集が「破壊的な見解を含んでおり、社会、国家および祖国（ワタン）の価値を嘲笑している」ためだったという²⁰。その後、この短篇集は紆余曲折を経てようやく日の目を見ることになったのである。

より若い作家の作品からも例を挙げる。アハマド・アル＝アーイディー（‘Aḥmad al-‘Āyidī, 1974 -）の『アッバース・アル＝アブドであること』（‘An Takūna ‘Abbās al-‘Abd, 2003年）である。若者言葉（口語）を大胆に混在させた前衛的な語りが特長であるこの作品に出てくるのは、「エジプトにはかつて『敗北』〔al-naksa 1967年の対イスラエル大敗北〕の世代というのがあった。／俺たちはその後の世代、『失うものは何もない』世代だ」という若者たちである²¹。

進歩したいだって？／だったら歴史の本を燃やさなきゃな。それから、後生大事にしているあの死に絶えた文明は忘れることだ。／過去の恩恵ばかり受けるのはやめにしないと。／ファラオ時代の歴史なんてぶっ壊してやればいい。（……）／死んで儲けるのはやめにしろ。／博物館を公衆便所に作り変えて初めてうまくいくだろうよ。²²

¹⁹ ‘Alā’ al-’Aswānī, *Nīrān Ṣadīqa*, Cairo: Dār mūrīt, 2004, pp. 9-10.

²⁰ ‘Alā’ al-’Aswānī, *Alladhī Iqtaraba wa-Ra’ā*, Cairo: Dār Sabīl, n.d., p. 5.

²¹ ‘Aḥmad al-‘Āyidī, ‘*An Takūna ‘Abbās al-‘Abd*, Cairo: Dār mūrīt, 2003, p. 41. スラッシュ／は原文中の段落変更を示す。

²² *Ibid.*, p. 39.

第三世界の多くに関する歴史を読めば、悲劇がいかに痛々しいかわかるさ。／大勢の人たちが革命によって「外国人による占領」から自由になったはいいが、そのあと自らすすんで「愛国者による占領」〔al-muḥtall al-waṭanī 愛国主義的占領者〕の爪の餌食になったんだから。／第三世界の三分の一くらいでは、ちゃんとした市民(muwāṭin)として扱われようと思ったら、「アメリカ」のパスポートを持ってないとだめだね。²³

古代エジプトの歴史は近代エジプト人の誇りの源泉の一つである。マハフーズの初期作品にも古代エジプト史に題材をとった一連の歴史小説がある。近代エジプト人のワタニーヤ(国民主義／愛国心)を支える重要な要素も、ここではあっさり価値を否定される。そのうえ、イデオロギーとしてのワタニーヤがかえってポストコロニアル期の国民を抑圧する道具となっている現実が皮肉に描かれている。

VII. 群像小説の伝統と国民的共同体²⁴

アスワーニーを一躍有名にしたのが、2002年に発表されたベストセラー『ヤコビアン・ビル』(‘Imārat Ya‘qūbīyān)である。この作品で彼はエジプト社会のタブーに大胆に挑戦した。不正選挙や拷問から宗教的過激主義にいたるまで、エジプトの暗部をここまで暴露的に描き、現職の大統領を直接揶揄した作品はそれまでなかった²⁵。アスワーニーは2011年の「1月25日革命」を準備した勢力の一つ、「キファアーヤ(もうたくさんだ)運動」(Ḥarakat Kifāya)に2004年の設立当初から参加していたが、革命の中心地となったタハリール広場で「あなたの作品があったからこそ、我々はここにいる」と語りかけられたという²⁶。これを額面通りに受け取るかどうかはともかく、30年間続いたムバーラ

²³ Ibid., p. 42.

²⁴ 本節の内容の一部は、筆者が以前に行った以下の発表にもとづいている。“Thalāth Riwayāt Miṣriyya,” Multaqā al-Qāhira al-Rābi‘ li-l-‘Ibdā‘ al-Riwā‘ī al-‘Arabī (Supreme Council for Culture, Cairo, February 17-20, 2008)；「マフフーズ、ムシャッラファ、アスワーニー——エジプトにおける群像小説の一類型について」京都大学イスラーム地域研究センター・中東現代文学研究会（京都大学、2012年1月22日）。

²⁵ もちろん、時代が後押しした面は大きい。米国が本格的に中東民主化への圧力をかけはじめるのは2003年のイラク戦争あたりからであるが、2001年の米国同時多発テロ事件とその余波の中で、そうした雰囲気は醸成されつつあった。エジプトの検閲が一種のガス抜きとして、このころからその手を少し緩めたようにも見える。

²⁶ Matthew Kaminski, “The Face of Egypt’s Uprising,” *The Wall Street Journal*, April 13, 2011. [<http://online.wsj.com/news/articles/SB10001424052748703385404576258603352822070?mg=reno64-wsj&url=http%3A%2F%2Fonline.wsj.com%2Farticle%2FSB1000142405274870338540457625860335282>]

ク体制の批判者として、彼は一つの象徴となっていた。

『ヤコビアン・ビル』は群像劇である。カイロ中心街に実在する近代建築遺産ともいふべき集合住宅を舞台に、さまざまな人生が交錯する。腐敗した社会で夢を絶たれた若者がイスラーム過激派のテロリストとなって命を捨てる一方、その元恋人が王政時代の残滓たる老人と結婚する。時代は1990年代初頭の湾岸戦争前後に設定されているが、世代や階層、ジェンダー（同性愛が描かれていることでも話題になった）、政治的立場、宗教などを異にする多様な人々と都市の記憶を通して20世紀エジプトの歴史がパノラマ的に描き出される。つまり、一つの建物がエジプト全体のメタファーとなっているのである。

しかし、このような構造をもつ小説はエジプトで彼が初めて書いたわけではない。マハフーズなどが繰り返し使っていた形式である。リンズイー・ムーアはこの作品がマハフーズの『ミラーマール』(*Mīrāmār*, 1967)をムバーラク時代用にアップデートしたものであると述べている²⁷。たしかに『ミラーマール』もいわゆるグランドホテル方式の作品だが、マハフーズにおけるその原型はもっと古く、『ミダック小路』(*Zuqāq al-Midaqq*, 1947年)にまでさかのぼるだろう。また同じような構造をもつ小説としてはムスタファー・ムシャッラファ(Muṣṭafā Muṣharrafā)の『背教者カンタラ』(*Qanṭara alladhī Kafara*, 1966)も挙げたい²⁸。『ミダック小路』は1940年代、第二次世界大戦の時代のカイロを舞台とする作品で、登場人物は同じ建物の住人ばかりではないが、非常に小さな路地の共同体のメンバーである。一方、全篇がエジプト方言で書かれた特異な作品『背教者カンタラ』は、1919年革命期の反英闘争を時代背景とするもので、中心人物はみなアブディーン地区にある伝統的な集合住宅(rab‘)の住民である。

『ミダック小路』、『背教者カンタラ』そして『ヤコビアン・ビル』、この三つの小説は共通点が多い。もちろん、すべてが群像小説である。中心的人物の一人である青年が物語の最後近くで死ぬことも共通している。そしてそれにもかかわらず、物語はそこで終わらず、末尾では住人たちが（まるで何事も起こらなかったかのように）生活を続けていくことが示唆されている。つまり、個人の劇的な死ではなく、集合的生の継続が前面

2070.html] (2014年8月3日閲覧)

²⁷ Lindsey Moore, *Narrating Postcolonial Arab Nations: Egypt, Algeria, Lebanon, Palestine*, New York: Routledge, 2018, p. 62.

²⁸ 作者は著名な物理学者アリー・ムスタファー・ムシャッラファ(1898–1950)の兄弟。生没年不詳。いわゆる「作家」ではなく、『背教者カンタラ』が唯一の作品であるが、「意識の流れ」の本格的な使用などその文学性は高く、近年再評価が進んでいる。

に押し出されているのである。

また二つの作品——『背教者カンタラ』と『ヤコビアン・ビル』——において、物語が結婚で終わっている。物語最後での結婚が意味するものもやはり、未来や生の継続であろう。さらに、各小説の最後のほうで住民の入れ替わりへの言及がある。たとえ人が入れ替わっても場所自体は存続することが強調されているのであり、ある意味で、作品の主人公はこうした場所・空間そのものであると言える。三つの作品名がすべて実在する地名であることも、そうした意味を強化するだろう²⁹。

以上のことすべてによって、舞台となっている場所が祖国全体の縮図ないしはメタファーとして機能していることが示されている。しかも、すべての作品において、異なる階層の住民たちが一つの場所を共有している。違いは、階層間の溝の有無であろう。20世紀の二作品では、そうした階層間格差が住民たちの一体感を妨げてはいない。どちらも結局は、旧市街あるいは伝統的地域の地縁共同体である。『ヤコビアン・ビル』はそうではない。ザキーとブサイナの結婚は例外と言わねばならないが、概して階層間の溝は深く、住民たちが一体感を持つ様子も描かれていない。それでもなお、一つの歴史的な建物という空間は共有しているのである。同じ類型に属する三つの作品であるが、こうした差異に、時代による祖国像の変化を見ることも可能であろう。

なお『ヤコビアン・ビル』では、祖国観の変化が人物同士の会話をとおしても表現されている。のちに結婚することになるヤコビアン・ビル最古の住人ザキーと若いブサイナの会話である。ザキーは王政時代の大家政治家を父にもち、フランス留学経験がある。そして、家族から富を奪った故ナセル大統領を心底から嫌っている。ブサイナは、母子家庭の長女であり、家族を助けるために身を売るようなことをしている。ザキーはナセルこそエジプトの個性 (al-shakṣiyya al-miṣriyya) を破壊した張本人だと言うが、ブサイナはナセルの死後に生まれていて、そもそも彼のことをよく知らない³⁰。以下に、世代による祖国観の違いが浮き彫りにされている二人の会話（口語）を引用する。

「どこに行きたいんだね？」

「こんないまいましい国から遠く離れたところならどこでもいいわ」

²⁹ 『背教者カンタラ』というタイトルはかけ言葉になっていて、Qanṭarat alladhī Kafara と最初の語を構成位相 (status constructus アラブ文法で言う al-muḍāf) にあるとすれば、「背教者の橋」となる。これは、かつてカイロに実在した橋ひいては通りの名である。なお中心人物の一人がカンタラと呼ばれる男性。

³⁰ ‘Alā’ al-’Aswānī, *‘Imārat Ya ‘qūbiyān*, Cairo: Dār Mīrūt, 2002, pp. 228-229.

「エジプトが嫌なのか！？」

「当然じゃない……」

「そんなことあるかい。自分の国が嫌いだなんて！」

「この国にいいところなんて一つも見ることがないから愛するなんて無理」(……)

「だけど、人はみな自分の国を愛さなければ。自分の国というのは母親みたいなものだよ。母親が嫌いな人がいるかね！？」

「ザキーさん、そんな歌や映画の話です。民衆はもう疲れきってるんだから」

「貧乏だからって、国を愛すること (waṭaniyya) ができないわけじゃない。エジプトの愛国的指導者だって、ほとんどが貧乏だったんだ」

「それはあなたがたの時代の話。今じゃみんな心底うんざりしちゃって」

「みんなって、誰のこと！？」

「みんなです。商業学校でいっしょだったあたしの友だちなんか、みんなどんな方法を使ってでもここから抜け出したいと思ってましたから」³¹

「君らの世代のことはさっぱり理解できん。私の時代には愛国心 (ḥubb al-waṭan) は宗教みたいなもの (zayy al-dīn) だった。反英闘争で多くの若者が死んだんだ」

ブサイナは背筋をのばして座りなおして、「イギリス人を追い出すためにデモをやってたの！？ だけど、こうやってもう出て行ったじゃない。それで国がよくなった！？」³²

二つ目の引用につづく箇所では、ザキーは、独裁こそが諸悪の根源であり、民主主義さえ達成されればエジプトは大国になれると説く。しかしブサイナは、そんな大きな話ではなくて、自分の夢はもっと身近な幸せであり、それを実現するためによその国に行きたいというようなことを口にするのである。

VIII. 移住文学 ('adab al-hijra) と祖国

経済学者のガラール・アミン (Galāl 'Amīn, 1935 -) によると、もともとエジプト人は祖国に対する執着が強く、なかなか祖国を離れたがらなかった。1952 年の共和革命直前の経済状態が悪いときでも、国外に出稼ぎに行くようなことはあまり考えず、自国の美と安楽さ、幸の多さを謳っていた。これが劇的に変化したのは 1970 年代である。それまで国外に行くのは専門職の人々が多かったが、このころから非熟練労働者が増え、行

³¹ Ibid., pp. 192-193.

³² Ibid., p. 282.

き先も変わった。湾岸やリビアなど産油国が登場し、若者たちが出稼ぎで出ていくようになった。「自分自身を作り上げるために」そうしたのだという³³。

1970年代以降のエジプトの若者たちの国外脱出は、マハフーズも書いていた。「祖国」エジプトに固執する自らの世代と、可能性を求めてアメリカに移住しようとする若者の対立を『鏡』(*al-Marāyā*, 1972年)に描いている。「『移住』(*hijra*)という言葉は我々の生活語彙を席卷し、我々古い世代のうちに驚きを起こした新しい言葉の一つだ」(4:285)という世相の中、優秀な医師である青年ビラールがアメリカへの留学の機会を利用し、そのまま祖国を捨てようともくろんでいる。それに対して「私」は「君らは文明に向かって移住しようとしている。自分の土地にそれを育てようともせず……」(4:287)と恨み言を言う。「私」にとって祖国はエジプト以外にありえないのだが、ビラールにとっては「科学こそが第一の祖国」であり、その象徴がアメリカなのだった(4:286)。同じような考えは『雨の下の子』(*al-Ḥubb taḥt al-Maṭar*, 1973年)にも見える——「祖国はもはや地理的な領土や境界線ではなくなった。それは思想や精神の祖国なんだ」(4:408)。このような若者の言葉は1919年革命世代の心を深く傷つけるが、1967年の敗北のショックなどが若者たちを移住へと駆り立てる。ただし、マハフーズの小説に本当の意味での外国渡航は出てこない。彼の作品の舞台は常にエジプトである。そこで最後に、最近の移住小説を検討し、そこにあらわれた祖国像の変化を見てみたい³⁴。

スヌアッラー・イブラーヒーム(Ṣun‘ Allāh ‘Ibrāhīm, 1937-)は「60年代世代」(*Jil al-Sittīnāt*)を代表する作家の一人である。筋金入りの左派知識人として、エジプトのみならず、アラブ世界ひいては世界の政治状況やグローバル資本主義への鋭い批判を創作をとおして行っている。いつもアメリカの中東政策を批判してきたその彼がアメリカを舞台として書いたのが、『アムリーカーンリー(アムリー・カーン・リー)』(*‘Amrīkānī* [*‘Amrī kān lī*], 2003年)である³⁵。

物語は1998年に設定されている。冒頭、比較史学を専門とするエジプト人教授シュクリーが、アメリカの大学に招聘されて西海岸の街へやってくる。彼が招聘に応じた理由

³³ Galāl ‘Amīn, *Mādhā Ḥadatha li-l-Miṣrīyīn: Taṭawwūr al-Mujtama‘ al-Miṣrī fī Niṣf Qarn 1945-1995*, Cairo: Dār al-Hilāl, 1997, pp. 164-172: pp. 166-168.

³⁴ 以下の一部は拙稿「現代エジプト小説とアメリカ」『 α -Synodos』(荻上チキ責任編集電子マガジン) vol.153+154 (2014/08/05)「特集: 中東イメージ革命」の内容と重なる部分がある。

³⁵ 「アムリーカーンリー」とは「アムリーカーン」(アメリカ人)というアラビア語の名詞に、所属等をあらわすトルコ語の接尾辞「リ(ー)」をつけた作者の造語である。これを分かち書きした「アムリー・カーン・リー」という副題は「自分のことは(かつては)自分で決められた」というような意味の文として読め、政治的含意のある言葉遊びになっている。

の一つは、学問上の活動に関してエジプトで迫害を受けていたことである。物語の中では、1990年代に同様の迫害や脅迫を受けてオランダに亡命したりベラルなイスラーム研究者、故ナスル・アブー・ザイド (Naṣr 'Abū Zayd, 1943 - 2010) などの話題も取り上げられている。筋らしい筋のないこの作品で扱われている政治や社会、文化の問題は多岐にわたり、要約するのは難しい。ただ、次のことは言えるだろう。常にアメリカを鏡として行われる議論から浮かび上がってくるのは、エジプト人自身のアイデンティティの問題、20世紀後半のエジプト（そしてアラブ世界全体）における悲惨な知的状況や政治的貧困、そしてそこに遠因の一つとして覆いかぶさるアメリカの影などである。陰鬱ではあるが、自分を戯画的に描く語り手（≡作者）によって、ブラック・ユーモアにあふれた作品になっている。

この作品の中に、祖国としてのエジプトが風刺されている箇所がある。シュクリーが、エジプト南部から移住してきた青年に出会うくだりである。青年はアメリカ国籍を取得する際、形だけアメリカに忠誠を誓い、そこが「祖国」だと宣言したが、本心を言えば「祖国はエジプトしかない」と思っている。シュクリーは彼に言う。

「祖国って、自分が安心感を得られるところだから」

すると彼は「そのとおり。アメリカ国籍はエジプトでも安心なんです。私の親戚同士が上エジプトの土地をめぐる争いを起こしたんですが、二人のうち片方はアメリカ国籍を持ってましてね。どうなったと思います？ 彼はアメリカ大使館に助けを求めた。そしたら、大使館がエジプト内務省に介入しましてね、すぐに中央治安部隊がその土地まで駆けつけて、彼の所有権を確保してやったわけです。わかりますよね？」³⁶

エジプトのアメリカへの従属ぶりを揶揄したエピソードである。祖国で安全に過ごすためには他国のパスポートが必要だという、アーイディーの作品に登場する若者が言っていたのと同じ皮肉な状況がここでも言われている。しかも、この青年は「あごひげを伸ばした」(multahin) と書かれているので、おそらくイスラーム主義者であることが示唆されているのだろう。よくあることだが、近代西洋的価値を否定するイスラーム主義者が、欧米諸国の国籍を得ることによって「祖国」の政権による迫害から守られているという矛盾を描いたものである。

³⁶ Ṣun' Allāh 'Ibrāhīm, 'Amrīkānī [ʿAmrī kān lī], Cairo: Dār al-Mustaḡbal al-ʿArabī, 2003, pp. 179-180.

つぎに、アスワーニーの『シカゴ』(Shikāghū, 2007)を見てみよう。ここに描かれているのは、2001年の9.11事件後のアメリカに暮らすエジプト人コミュニティである。この作品も群像小説で、とくにイリノイ大学シカゴ校で医学を学ぶエジプト人留学生や、そこで医学を教えているエジプト人教授(やその同僚のアメリカ人教授)らが中心的な登場人物になっている。

学生としては、成績優秀だが、政府に対する抗議活動ゆえにエジプトを出ざるをえなかった若者、エジプトの地方都市から突然アメリカの大都会に移り住むことになった純朴な女子学生、エジプト与党青年部の幹部で全米エジプト人学生連盟の会長を務めている偽善者などが出てくる。

一方、教授陣の中にもさまざまなタイプのエジプト人がいる。ある教授は、ナセル時代に一家が没落し、1960年代にアメリカに移住した。アメリカ人女性と結婚し、アメリカ国籍を取得して「エジプト人をやめた」大のエジプト嫌いである。自分では完全なアメリカ人になったつもりでいるが、周囲からいまだにエジプト人とみられることに不満を抱いている。エジプトで学生運動をしていた恋人を捨てて1970年代にアメリカに移住した男性も、アメリカ人の女性と結婚し、やはりアメリカ国籍を得ているが、最近になって人生の選択を誤ったと感じ始めている。エジプトの諜報機関から国家への忠誠を疑われているコプトの教授もいる。彼らはおおむね、かつてマハフーズが70年代の小説に登場させたような新しい「移住」世代に属していた人々だ。その彼らの、移住から30年以上経ったあとの姿がここに描かれている。

これらの人物は、それぞれ宗教や政治的立場、文化的志向などを異にしており、そのままエジプト社会の縮図のようにもなっている。この作品もまた、基本的には、アメリカという舞台を使つてのエジプト社会の考察・批判ということができよう。

物語では、エジプト大統領(ムバーラク)の訪米に合わせて、一部のエジプト人留学生とアメリカの友人たちがメディアの前でエジプト政権批判を展開しようと秘かに計画を練る。しかし、これを嗅ぎつけたエジプト諜報機関の責任者がエジプト人学生に向かってこんなことを言う。

俺はいろんな県で警察将校を十年やった。いろんな村や街区を回ってエジプト社会の底辺を見てきた。はっきり言うておくが、エジプト人は民主主義なんて、これっぽっちも関心がない。それにあいづらはそれに値するような連中じゃない。エジプト人はこの世で三つのことにしか関心をもっていない。宗教と日々の糧と子供たち、

なかでも大事なのは宗教だ。エジプト人が革命に向かうのは、唯一、自分たちの宗教がだれかに攻撃されたときだけなんだ。³⁷

この箇所で皮肉に思えるのは、アハマド・アミンが書いたようなナポレオン時代のエジプト人のメンタリティが、21 世紀になっても変わっていないと諜報部員が主張していることだろう。その当否はさておき、祖国を出た知識人の理想の祖国像と祖国にいる大衆の素朴な感情との乖離が指摘されているのである。

最後にハーリド・アル＝ハミースィー (Khālid al-Khamīsī, 1962 -) の長篇『ノアの方舟』(*Safīnat Nūh*, 2009 年) を取り上げたい。これこそまさに「移住小説」と呼ぶにふさわしい作品である。10 人あまりのエジプト人移住者たちの物語が中心になるが、周囲には同国人やほかの国の移住者たちの姿もたくさん描かれる。渡航先は北米だけではない。欧州各国や湾岸諸国、ニュージーランドからグルジアにいたるまでおびただしい数の地名が出てくる。

腐敗した社会の犠牲者、失業した若者、社会的圧迫を受けるキリスト教徒、娼婦など、男女ともにさまざまな階層に属するエジプト人たちが、ときに死の危険を冒しながら国を出ていく(彼らの希望を叶える密入国仲介者の物語も入っている)。「ノアの方舟」は、エジプト社会に迫った危機的状況を強く示唆する題名であるが、同時にこれは 2000 年代の「出エジプト記」でもある。

エジプトの若者がみな国を愛していないわけではない。しかしそれでも、出ていかざるをえない状況がある。たとえば、ある若者は自分たちの世代がおかれた境遇をこんなふうに口語で説明する。

僕はエジプト人として、自分の国が好きだし、育った地区の通りを愛してますけど、国のためにも出ていかなくちゃと思っています。そもそも、国のほうが僕を必要としてくれないし、僕を仕事につかせることもできない。自分が国のお荷物になっているような感じがします。(……)「我々の人口は増えすぎた。君たちをどうしていいのかわからない」——政府はどこでもずっとこんなふうに言い続けています。そこらじゅうの通りに置かれた看板を見てください。「頭を使えば、みんなで食べていける」ってやつです。もちろん、世間の人々はすぐに言い換えましたよ——「頭を使えば、みんなで国を出ていける (nihāgir kulli-na)」って。³⁸

³⁷ ‘Alā’ al-’ Aswānī, *Shikāghū*, Cairo: Dār al-Shurūq, 2007, p. 357.

³⁸ Khālid al-Khamīsī, *Safīnat Nūh*, Cairo: Dār al-Shurūq, 2009, p. 10.

作中では一章ごとに中心人物が変わり、別の物語が展開していく。これだけだと世界に拡散していくばらばらなエピソードにすぎないわけだが、この作品にはそれらをつなげる構造が組み込まれている。まず、前の話の脇役が次の話の主人公になる。つまり、話の内容はすべて違うが、少しずつつながっている。さらに、最後の章の語り手（女性）が、実は各章の中心人物すべてを繋げる環になっている。彼女こそ全巻を通しての語り手であり、登場人物たちの対話者であったことが最後に判明する。重要なのは、彼女——作者と同じくカイロの中心部に住んでいる——だけが、エジプトに残る意志を持ち、エジプトを去ろうとする人々の物語を書き留めようとしていることである。カイロの広場に立つムスタファー・カーミル像に向かって、彼女は言う——「たとえば私がカイロに暮らしていなかったとしても、カイロに暮らしたいと願ったことでしょう」³⁹。こうした構造によって、作品全体に統一感が与えられ、拡散していく悲劇や苦難の物語が、結局はやはりエジプト国民の物語としてまとめ上げられるのである。

彼女は 2000 年代の後半に 40 歳であるから、作者と同じように 1960 年代の生まれだろう。マハフーズ世代とはすっかり環境が変わり、それにつれて祖国観も変わった。この作品は以下のような語り手の言葉で閉じられる。

私の目の前にノアの方舟があらわれた。陸地を水没させてしまった洪水の上を、それは漂っている。私には世界の卵が孵化を待っているように思えた。知られざる世界、どのようなものとなるのか予想もできないような世界、そうした世界の創造に備えるしづくのように思えた。方舟は、私の目には、ヌーンの文字 (ن) のように映った。下が半円になっていて、その上に輝く太陽がある。その上にもまた半円、つまり虹がかかって、完全な円になっている。そして両者がいっしょになって一つの新しい宇宙をかたちづくる。古い宇宙を爆発させることによって、それは形成される。ピラミッド型をしたノアの方舟。その頂上は脱出する方舟の甲板に置かれた光明、遠い国々へと向かう光明のように見える。

私の想像の中で、方舟はハートの形に描かれている。そしてそれは今までとは異なった鼓動を響かせ、世界をつくりなおすことだろう。⁴⁰

こうしたビジョンの解釈は難しいが、作者自身が言うには、方舟はエジプトであり、水平線の彼方にあるのはよその岸辺ではなく「未来」だという⁴¹。ハミースィーは筆者に対

³⁹ *Ibid.*, p. 399.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 411.

⁴¹ “Khālīd al-Khamīsī: “Safīnat Nūḥ” Hiya Miṣr: wa-Kitābatu-hā Kānat ‘Ashal min Tākṣī,” *al-Ra’y Digital*,

しても、祖国とは「私たちの創造力や想像力によって生み出される永続的で独創的な形成そのもの、要するに固定的なものではなく、常に新たな生成と新たな展望が繰り返される」ものだと言った⁴²。この言葉は引用部分と重なり合う。これらの言葉を愚直に解釈すれば、語り手のビジョンの中では、祖国からの脱出は、すでにあるどこか別の国への移住ではなく、新たな祖国創出への船出ということになるのだろう。

以上の三作品で、海外へ渡るエジプト人たちは、かつての留学生小説の主人公のように、目的地の文明や文化の価値に惹きつけられて祖国を後にするわけではもはやない。むしろ、エジプトから逃げ出すために国外へ向かう。しかしそれでも、彼らの多くはエジプトとの関係を断つわけではない。どの作品でも外国という舞台は、圧政的なエジプトの体制を批判したり、エジプト人自身のアイデンティティを再考したりするために選ばれている。そうした意味では、やはり「祖国エジプト」はまだ完全には捨てられていないと言える。

IX. おわりに

近代エジプトでは、「ワタン」と国民国家が——アラブ世界においては例外的に——大きく一致する傾向をもってきた。エジプト人にとって「祖国」はゆるぎないものであったように思える。少なくとも 20 世紀の終わりになるまではおおむねそうだった。エジプトの作家たちは、いかに政権と立場を違えようと、祖国エジプトの価値についてはあまり疑いをもっていなかったように見える。

しかし時代は変わった。アラブ主義だけでなく、ワタニーヤすら、もはや無条件に肯定される状況ではなくなりつつある。国民は依然として貧困にあえぎ、不公正や生活苦に耐えている。しかも経済的格差や不平等はますます拡大しつつある。情報伝達手段の発展にともない、国内外の生活格差は誰の目にも明らかになり、自由の欠如に対する不満も増大した。しかし、そうした国民の不満をよそに、政権はあいかわらず権威主義的な政治を続け、私腹を肥やし、自己保身を図っている。そのような状況のなか、ワタンという象徴は圧政の正当化に利用される。若い作家たちの作品を読むと、そうした矛盾に対する嫌悪感が包み隠さず表現されている。まさに、革命前夜の雰囲気を実にあら

19/10/2009 [http://www.alraimedia.com/Home/Details?Id=484092e9-f10f-403f-bd2e-f8577e1a5055];

¹Andrā Maṭar, “Khālīd al-Khamīsī fī Bayrūt: Kitābat al-Khiffa wa-l-Nisyan,” *al-Qabas al-’Ilīkrūnī*, 7/3/2017 [https://alqabas.com/366850/] (2018 年 8 月 31 日閲覧)

⁴² 筆者によるインタビュー (2013 年 3 月 29 日、カイロ)。

わしていたと言える。外国への移動が一部の人間の特権ではなくなり、若者たちの選択肢の一つとなりつつある時代であれば、祖国脱出願望が出てくるのは当然のことだろう。

とはいえ、作中人物が「祖国エジプト」に対する不信感をいかに表明していたとしても、物語全体を見れば「祖国」が完全に放棄されたようには見えない。群像小説の構造は、さまざまな問題はあれど共同体の生は続く、ということを含意している。また移住小説においても、たしかに祖国の政治・社会状況が痛烈に批判されるが、それでもやはり外から祖国のことを考え続けているのである。

もちろん、以前のように単純で素朴な祖国愛は今や描けないかもしれない。19世紀以来はぐくまれてきたワタン意識がすぐに変ってしまうこともありえないだろうが、単に盲目的な愛国にとどまらない、新しい祖国愛のかたちを模索する試みが——ハミースィーの『ノア方舟』もその一つだが——これから必要とされるのだろう。

最後に、本稿で扱えなかった対象をいくつか挙げると、女性作家の作品、農村や地方都市の小説、湾岸諸国への移住小説、近年発達しつつあるように見える SF 小説、そして革命後の状況を描いた小説などがある。これらの作品からは、本稿で指摘したものとは異なる祖国像が浮かび上がるかもしれない。SF などの新しいジャンルからは、今までになかったような斬新な祖国像を表現した作品が出てくる可能性もある。これらの検討については今後の課題としたい。